

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

半沢幹一編『直喩とは何か——理論検証と実例分析——』

直喩は他の種類の比喩に比べて多用され、技法や調査項目としても取り上げられながら、直喩と隠喩のメカニズムが同一であるとみなされてきたことから、比喩の理論的な考察対象とされてこなかった。本書は、直喩と隠喩に本質的な差があると認める立場から、直喩とは何かを多様な視点から捉えるものである。

本書の構成は次のとおりである。「緒言」に続き、「Ⅰ 理論検証編」には、「西洋修辞研究における simile」(三田寛真)、「五十嵐力『新文章講話』——明治期修辞学における直喩の再考——」(菊地礼)、「山口仲美『平安文学の文体の研究』——古典文体と直喩——」(稲益佐知子)、「中村明『比喩表現の理論と分類』——何が問われたのか?——」(半沢幹一)、「現代日本における直喩論」(半沢幹一)、「認知言語学における直喩研究」(松浦光)。「Ⅱ 実例分析編」には、「同一性の比喩論——比喩指標「まさに」+ Nの形式をめぐる——」(松浦光)、「内田百閒『阿房列車』の直喩表現——体言型喩辞と用言型喩辞——」(長沼英二)、「村上春樹『貧乏な叔母さんの話』の直喩について——比喩の「わかりやすさ」とは?——」(稲益佐知子)、「文学を「味わって」読む「文学少女」シリーズの直喩」(菊地礼)、「芭蕉句の比喩的対比 指標は何のために」(半沢幹一)。末尾に、「本編詳細目次」「後記」「執筆者一覧」を付す。(椎名渉子)

(2023年5月18日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 306頁 定価 3,850円 ISBN 978-4-8234-1190-8)

黄徳寛・陳秉新著、陳祥・王勇萍・高橋俊訳、遠藤隆俊監訳『漢語文字学史』

本書は2014年に刊行された黄徳寛・陳秉新『漢語文字学史』(安徽教育出版社)の日本語訳である。漢語文字学の生成と発展を、中国社会の歴史的・文化的変遷との関係や、代表的な人物や著作の紹介とともに総体的に示す。

漢語文字学の発展の歴史は4つの時期に区分されるとし、それに従って次のように全4編から構成される。「第一編 文字学の創立期【周秦—兩漢】」「第二編 文字学の停滞期【魏晉—元明】」「第三編 文字学の振興期【清代】」「第四編 文字学の拡大発展期【近代以後】」。

第一編は創立期の叙述である。「第一章 文字学の萌芽」「第二章 文字学の創立」からなり、『説文解字』の出現を以て正式な漢語文字学の創立の表れとしている。第二編は停滞期とされ、「第一章 『説文』から字書の編纂へ(上)」「第二章 『説文』から字書の編纂へ(下)」「第三章 『説文』の継承と発展」の3章からなる。『説文解字』を踏襲した字書の編纂や研究が多くを占めると評される。第三編は振興期である。「第一章 清

代の『説文』学」「第二章 金石学の復興と古文字学的分立」からなる。伝統的な文字学が最高峰に達した時代とされる。第四編は発展期であり、19世紀の甲骨文の発見、20世紀の資料の出土、近代漢語の文字学理論の探究などが古文字学の発展を促した。また漢字改革運動による転換期でもあった。「第一章 化学的な古文字学の建立」「第二章 甲骨文研究」「第三章 金文研究」「第四章 戦国文字研究」「第五章 秦系文字研究」「第六章 理論の探究と体系の構築」「第七章 清末以来の漢字改革運動」「第八章 世紀の交における文字学研究」以上8章を割く。(遠藤佳那子)

(2023年5月30日発行 汲古書院刊 A5判横組み 512頁 定価11,000円 ISBN 978-4-7629-6731-3)

山梨正明著『小説の描写と技巧——言葉への認知的アプローチ——』

本書では、欧米文学と日本文学の代表的な文学作品を分析対象に、散文芸術としての文学表現の描写の諸相を認知言語学的な視点から考察する。本書は言語媒体による表現技巧のメカニズムの解明だけでなく、修辭的な表現技巧を可能とする人間の知のメカニズム解明にも寄与するものである。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 序章」,「第2章 文学表現における描写の諸相」,「第3章 描写の客観性と主観性」,「第4章 認知文体論からみた文学表現」,「第5章 虚構と病理からみた文学の創造性」,「第6章 終章」。末尾に「参考文献」「引用例出典」「索引」を付す。(椎名渉子)

(2023年5月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 250頁 定価3,740円 ISBN 978-4-8234-1159-5)

小林芳規著『小林芳規著作集 第四巻 國語史と文獻資料』

本書は『小林芳規著作集』全八巻のうち第四巻にあたる。まず国語史の概説や展望記事である「国語史研究の歴史」「昭和三十年における国語學界の展望 国語史・国語學史」「昭和35・36年における国語學界の展望 資料・辭書・索引」「訓點資料・記録資料(国語學の新領域)」以上4編を収録する。

そして以下、19編の国語史資料に関わる論考や解説文を収載する。内容は以下のとおりである。「古今和歌集卷第二斷簡(高野切)一幅」「高山寺藏「三寶繪」詞章遺文」「(書評)「將門記——研究と資料——」を読む」「高山寺藏「寶志和尚傳」院政期寫本について」「醍醐寺藏「藥師」二本について——所収説話と今昔物語集との關係を中心に——」「石山寺藏の片假名交り文の諸資料について」「隨心院藏の平家物語斷簡について」「隨心院經藏善本解題」「平安詩文殘篇訓點解説」「仁和寺御經藏の疏」「仁和寺藏古訓點資料四種」「国語史研究資料としての法華百座聞書抄」「『国語史資料集——圖録と解説——』所収文献」「史記」「仁和寺藏秦中吟延慶二年書寫加點本」「六地藏寺善本叢刊「老子經上下」「長恨歌并序」「御調八幡宮藏の一切經について」「倭讀要領(解説)」「石山寺奉納詠源氏物語卷々和歌北村季吟 一卷」。(遠藤佳那子)

(2023年6月6日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 464頁 定価4,950円 ISBN 978-4-7629-3663-0)

レナード・タルミー著、岩田彩志・菊田千春・西山淳子監訳、岩田彩志・宮浦国江・菊田千春・友次克子・眞田敬介訳『認知意味論を目指してⅠ』

認知言語学の創始者レナード・タルミーの、「文法の意味論」としての認知意味論の研究成果をまとめた翻訳が全4冊のシリーズとなって刊行される。すでに第二弾まで刊行されているが本書はその第一弾である。これまで一部を除き、日本語に翻訳されることがなかったため、本書はタルミーの著書の初めての日本語の翻訳本となる。

本書の構成は次のとおりである。「序章」(岩田彩志訳)に続き、「第1部 言語における概念構造化の基盤」には「第1章 文法と認知の関係」(宮浦国江訳)、「第2部 形状的構造」には、「第2章 言語における仮想的移動と「知覚/概念化」」(菊田千春訳)、「第3章 言語はどのように空間を構造化するか」(友次克子訳)。「第3部 注意」には「第4章 言語における「注意を向ける対象範囲の選定」」(眞田敬介訳)。末尾に「参考文献」「索引」「著者・監訳者・訳者紹介」を付す。(椎名渉子)

(2023年6月24日発行 開拓社刊 A5判横組み 370頁 定価4,620円 ISBN 978-4-7589-1391-1)

小川誉子美著『開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった——東西交流と日本語との出会い——』

「中国人、中国語・漢字」を切り口にした、西欧人による日本語研究史を物語る一書である。

本書は概ね時系列に叙述されており、まず大航海時代の宣教師が中国語とどのように向き合ったのか、「第一章 日欧の出会いと中国」「第二章 在華宣教師が学んだ中国の言葉と中国文明」において紹介される。次いで幕末の時代、イギリス、フランス、アメリカなどが言語面でどのような対策を講じ、学習と研究の基盤を築いたか、そして日本国内の洋学事情について、後半の「第三章 開国前夜の英・仏の中国語・日本語学習」「第四章 日米交渉と日本の近代学問」「第五章 西洋で誕生した中国語・日本語学者」で語られる。巻末に「人名索引」および「事項索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2023年6月30日発行 ひつじ書房刊 四六判縦組み 205頁 定価2,970円 ISBN 978-4-8234-1189-2)

平田一郎・行田勇・保坂道雄・江連和章編『ことばの謎に挑む——高見健一教授に捧げる論文集——』

本書は、学習院大学文学部高見健一氏のご退職を記念し、研究仲間、同僚、教え子が書き下ろした論文集である。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」「高見健一教授 履歴」「高見健一教授業績一覧」に続き、「思い出の記」には「高見先生の思い出」(久野 暉)、「追悼 高見さんの思い出」(中島平三)。「寄稿論文」には、「英語史における他動性(transitivity)の

方向」(秋元実治),「Kuno and Takami (1993) の再考」(江頭浩樹),「日本語における syntax spurt の特徴づけ」(伊藤友彦),「日本語プロソディーに見られる語用論的側面」(窪蘭晴夫),「They had the game won. は「彼らは試合に勝った」のか——「完了」の have + o + pp 構文の意味分析——」(熊澤清美),「否定辞融合助動詞で始まる疑問文のデフォルト解釈」(久野 暉),「日英対照「なぜ受身か」試論」(真野 泰),「統語的難問——“It is Adjective of NP to VP” 構文の構造と派生——」(松原史典),「日本語の提示機能について」(三原健一),「『同定』に基づく全域的移動構文分析」(三輪健太),「弾道運動動詞の含意について」(水野佳三),「日英語の増減表現について——動詞志向と名詞志向の観点から——」(村尾治彦),「分詞の形容詞的用法の規則性と例外」(中島平三),「『ものか/もんか』否定文の統語構造」(西岡宣明),「編出分析と仮定法倒置条件節の統語論」(野村忠央),「explain は交替するのか、しないのか——与格交替への使用基盤的アプローチ——」(野中大輔),「結束構造の種類と従属接続詞の等位構造」(岡田禎之),「英語前置詞 OF の意味」(奥野忠徳),「強意再帰代名詞の機能的分析」(大野英樹),「心的反応性と志向性の間——想念的モダライザーの意味解釈——」(澤田治美),「助動詞と否定」(高見健一),「文の成立と助詞「は」——現代語「は」の本質的性格と繁辞性——」(竹林一志),「『DST に基づく SLA 研究の動向』と「日本の SLA 研究における展望」(富田祐一),「英語の感嘆を表す yes/no 疑問文について」(上田 功),「日英語の〈スル〉的・〈ナル〉的類型と事象無効化」(江連和章),「理論をつなぐ架け橋を求めて——進化言語学の窓から見る新たなことばの世界——」(坂保道雄),「機能的構文論による英語の受身文の分析——視点・状態変化・特徴付け——」(行田 勇),「慣習的推意の神話について」(平田一郎)。末尾に「執筆者一覧」を付す。(椎名渉子)

(2023 年 6 月 30 日発行 開拓社刊 A5 判横組み 372 頁 定価 6,380 円 ISBN 978-4-7589-2386-6)

玉岡賀津雄著『決定木分析による言語研究』

決定木分析とは、ある目的の事柄を複数の背景要因で説明したり、構成する背景要因の構造を把握したりするための解析法で、樹形図によって視覚的に結果を把握することができるものである。もとはマーケット・リサーチのために開発されたものだが近年は多様な分野でも用いられる。本書はこれを言語研究にも応用できることを多様な事例と共に示す書である。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」に続き、「第 1 章 決定木分析——主語の有生性と動詞の自他性の関係——」,「第 2 章 分類木分析——マレーシア人日本語学習者のスピーチレベルシフト——」,「第 3 章 回帰木分析——行為要求表現における丁寧度の変化——」,「第 4 章 回帰木分析——中国人日本語学習者による間接発話の理解——」,「第 5 章 分類木分析——山口方言話者のアクセントにおける世代間の変化——」,「第 6 章 分類木分析——中国人および韓国人日本語学習者の連濁の習得——」,「第 7 章 分類木分析——絵本にみる疑問詞の習得順序——」,「第 8 章 分類木分析——副詞と共に起る接続助詞の文中・文末の出現頻度——」,「第 9 章 分類木分析と回帰木分析——中国人日

本語学習者による精神動詞および物理動詞の二格とヲ格の付与——」,「第10章 回帰木分析——中国人日本語学習者の助言の難しさを決める諸要因——」。末尾に,「おわりに」「索引」「執筆者紹介」が付く。また,本書には分析練習用のデータをダウンロードできるURLも付されている。(椎名渉子)

(2023年7月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 300頁 定価3,850円 ISBN 978-4-87424-948-2)

築島裕著『築島裕著作集 第六冊 語彙・語釈・文法』

第六巻は語彙,語釈,文法史,学史に関わる論考が分野ごとに発表順に収載されている。

まず語彙に関する論考として,以下14編を収める。「國語の語彙の變遷」「和訓の傳流」「日本書紀古訓中に残存する古語」「訓點語彙と和文語彙」「訓點資料の語彙——殊に平安初期訓點語彙の性格について——」「訓點語彙小見」「『本草和名』の和訓と『醫心方』の萬葉假名和訓」「平安時代の訓點資料に見える「和文特有語」について」「訓點語彙編纂の構想」「漢文訓讀語と語源」「國語史上の訓點語彙」「日本語の數詞の變遷」「源氏物語の漢語の一性格」「和語と漢語」以上である。

語釈に関わる論考として「ツンザクとヒツサグとの語源について」「(質問箱)「アバタ」の語源」「定家本古今和歌集の本文の一側面——「したてるひめとは／あめわかみこのめなり」をめぐって——」「訓點語彙の歴史的變遷の一側面——「アナヅル」「ミダレガハシ」「ウツクシム」「ノムド」など——」「「おそる」「おそらく」小考——平安時代の漢文訓讀語と現代語との關聯——」「訓點資料の「オボシメス」「古訓點語彙小考——「ずたずた」の語史をめぐって——」以上7編,また尊敬語に関わる論考「尊敬を表す「シメタマフ」の成立について」「「おほん」か「おん」か」「尊敬語タマフの系譜」「源氏物語の尊敬語「ます」をめぐって」以上4編がある。

文法史の分野では「(古典解釋のための助動詞)なり・り・らし・ごとし」「文法史についての諸問題」「中古の文法」「伊勢物語の解釋と文法上の問題點」「漢文訓讀文の文法」以上5編を収載する。そして最後に,「(學風と學問)大槻文彦『廣日本文典』」「橋本文法」「句とは何か——零記號の辭、文節——」以上の文法学説史に関わる3編を収める。(遠藤佳那子)

(2023年7月20日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 642頁 定価19,800円 ISBN 978-4-7629-3626-5)

佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂編『日本手話で学びたい!』

本書は,ろう児が日本手話で学ぶ権利の獲得のため,日本手話を第一言語とするろうの子どもたちの教育環境における課題について取り上げる。2022年に北海道札幌聾学校の児童が日本手話で学ぶ権利を求めた訴訟にあたり,当事者たちやろう教育実践者から寄せられた意見書をもとに一般読者に向けてまとめたものである。2016年に刊行された『手話を言語と言うのなら』(森杜也・佐々木倫子編)の姉妹編という位置づけをと

る。

本書の構成は次のとおりである。「この本を読んでくださる方へ」,「序章 日本手話をないがしろにし続けるろう教育——札幌聾学校訴訟まで——」(田中瑞穂・佐々木倫子・佐野愛子)。「第1部 ろう教育における「手話」」には,「第1章 日本手話とはどういう言語か」(森壮也),「第2章 ろう児の発達における日本手話の重要性」(松岡和美),「第3章 日本手話と日本語対応手話の特徴と違い」(菊澤律子)。「第2部 ろう教育で用いられるべき言語」には,「第4章 札幌聾学校の授業言語について」(ジム・カミズ (訳 佐野愛子)),「第5章 自然手話とろう教育」(デボラ・チェン・ピクラー, ポール・ドゥデイス, オードリー・クーパー (訳 松岡和美・佐野愛子)),「第6章 スウェーデンのバイリンガル教育から」(クリステル・フォンストロム (訳 佐野愛子)),「第7章 米国におけるアメリカ手話をういたろう教育」(富田望),「第8章 明晴学園のバイリンガル・バイカルチュラルろう教育」(学校法人 明晴学園),「第9章 バイリンガルろう教育を阻むもの」(佐々木倫子)。「第3部 権利としての日本手話」には,「第10章 「日本手話」と明記した手話言語条例」(戸田康之),「第11章 ろう児が日本手話で学ぶ権利について」(杉本篤史)。「提言 これからのろう教育のあり方について」(佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂)。末尾に「執筆者一覧」を付す。(椎名渉子)

(2023年7月31日発行 開拓社刊 A5判横組み 184頁 定価1,870円 ISBN 978-4-8234-1210-3)

高橋忠彦・高橋久子著『古本節用集の総合的研究(上巻・下巻)』

室町時代の国語辞書を代表する一類として節用集を位置付け,古本節用集に関する論考を収録したのが本書である。既刊『いろは分類体辞書の総合的研究』(2016),『意味分類体辞書の総合的研究』(2021)に続く,室町時代の多様な国語辞書の全貌を明らかにすべく編まれた論文集である。冒頭には序論にあたる「古本節用集総論」が置かれ,以下,諸本の分類に従って「第一部 伊勢本の研究」「第二部 印度本の研究」「第三部 乾本の研究」のように配列される。さらに「第四部 中世語彙と古本節用集」に語彙史に関わる論考を配し,既出と書き下ろし合わせて全43編の論考を収載する。

なお巻末「あとがき」にQRコードが付けられており,書籍上に公開しきれない各資料の全文調査の結果や語彙索引など,膨大な研究成果をウェブ上からダウンロードして閲覧できるようになっている。(遠藤佳那子)

(2023年8月4日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 1512頁 定価30,250円 ISBN 978-4-8386-0781-5)

ナロック・ハイコ, 青木博史編『日本語と近隣言語における文法化』

本書は,日本語および近隣言語の文法化の特徴についてまとめられた論文集である。日本語の多様な側面からのみならず,日本語にはない文法化の現象も取り上げられている。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第196巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「日本語と近隣言語における文法化」(ナロック ハイコ・青木博史),「係り結びの発生と構造 諸仮説検証」(ナロック ハイコ),「訓点語の文法化 漢字・漢語による模倣借用との関連から」(ジスク マッシュー),「「ならで」「ならでは」の一語化と機能変化」(宮地朝子),「接続詞と文法化 「なので」の成立」(青木博史),「言語接触と文法化について 近現代日本語の「より」構文を事例として」(柴崎礼士郎),「漢語「正直」の機能・用法の拡張」(東泉裕子・高橋圭子),「琉球諸語における双数形 類型と歴史」(下地理則),「中国語東北官話における被害者の表示」(李佳樑),「一から多への言語変化 類推と群化」(小柳智一),「意味変化の方向性と統語変化の連関」(北嶋勇帆)。末尾に「索引」と「執筆者紹介」が付く。(椎名渉子)

(2023年8月4日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 330頁 定価7,480円 ISBN 978-4-82341-169-4)

三原健一著『日本語構文大全 第III巻——談話の地平へ——』

本書は同著者による既刊『日本語構文大全 第I巻——アスペクトとその周辺——』(2022)『日本語構文大全 第II巻——提示機能から見る文法——』(2022)に続く第3巻目であり、本書をもって完結となる。

生成文法理論による言語研究が分析対象としてきたのは独立して存在する文(sentence)であり、談話は除外されてきた。しかし実際の言語は談話的要因の影響を受けており、特に談話法的な制約を受ける構文は、談話構造の探究なしに言語現象を明らかにすることは不可能である。こうした立場から本書では照応関係以下の各種構文を取り上げ、生成文法理論の成果に新たな知見を加える。

本書の構成は以下のとおりである。「第1章 談話と文法」「第2章 照応関係」「第3章 省略構文」「第4章 後置文」「第5章 かき混ぜ操作」「第6章 分裂文」「第7章 主題標識残留構文」以上7章からなる。なお巻末に索引を付す。(遠藤佳那子)

(2023年8月25日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 308頁 定価4,620円 ISBN 978-4-87424-954-3)

沖森卓也編、木村一・木村義之・陳力衛・山本真吾執筆『図説 日本の辞書 100冊』

本書は『図説 日本の辞書』(おうふう, 2008)と『図説 近代日本の辞書』(おうふう, 2017)を合冊改編し、増補改訂を加えたもので、全105点の辞書を取り上げている。「序章 辞書の定義と分類」において総説が述べられ、「第1章 古代の辞書」「第2章 中世の辞書」「第3章 近世の辞書」「第4章 近代の辞書」のように各時代の概説のうえで主要な辞書について解説がなされる。3章は「第1節 近世の辞書の広がり」「第2節 節用集」「第3節 唐話辞書とその周辺」「第4節 蘭和と蘭辞書」の以上4節に分類されており、4章も「第1節 英華英字典」「第2節 英和英辞書とその周辺」「第3節 漢語辞書・漢和辞書」「第4節 国語辞書」「第5節 特殊辞書・専門語辞書」の5節から構成されている。

辞書の解説には必ず原資料の影印が一部掲載されており、その体裁の一端をうかがい知ることができるよう配慮されている。巻末には「書名索引」「人名索引」「事項索引」を備える。(遠藤佳那子)

(2023年9月20日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 302頁 定価2,750円 ISBN 978-4-8386-0660-3)

佐藤道生著『日本人の読書——古代・中世の学問を探る——』

読書がまだ厳格な儀式であった古代・中世において、主な読書の対象であった漢籍に対して日本人がどのように向き合ってきたのかを論じる。本書では特に「伝授」という視点から、「証本の書写」と「訓読の伝授」の繰り返しの中で展開したという見通しのもと、日本の読書史を考究する。

本書は本篇と付篇、全26章からなる。まず本篇は以下17章から構成される。「第一章 古代・中世 日本人の読書」「第二章 日本に現存する漢籍古写本——唐鈔本はなぜ読み継がれたのか——」「第三章 古代・中世 漢文訓読史」「第四章 平安貴族の読書」「第五章 藤原道長の漢籍蒐集」「第六章 藤原兼実の読書生活——『素書』と『和漢朗詠集』——」「第七章 養和元年の意見封事——藤原兼実「可依変異被行攘災事」を読む——」「第八章 『論語疏』中国六世紀写本の出現」「第九章 平安時代に於ける『文選集注』の受容」「第十章 金澤文庫本『春秋経伝集解』、奥書の再検討」「第十一章 室町後期に於ける『論語』伝授の様相——天文版『論語』の果たした役割——」「第十二章 清原家の学問と漢籍——『論語』を例として訓点と注釈書との関係を考える——」「第十三章 吉田家旧蔵の兵書——慶應義塾図書館蔵『七書直解』等の紹介を兼ねて——」「第十四章 「佐保切」追跡——大燈国師を伝称筆者とする筆蹟に関する考察——」「第十五章 伝授と筆耕——呉三郎入道の事績——」「第十六章 『古本孝経』永仁五年写本の問題点」「第十七章 猿投神社の漢籍古写本——『史記』『春秋経伝集解』の書写者を探る——」。

付篇は9章からなる。「第十八章 『朝鮮群載』巻十三の問題点」「第十九章 日本漢学史上の句題詩」「第二十章 『本朝麗藻』所収の釈奠詩——句題詩の変型として——」「第二十一章 藤原有国伝の再検討」「第二十二章 大江匡房と藤原基俊」「第二十三章 大江匡房の著作と『新撰朗詠集』」「第二十四章 平安後期の文章得業生に関する覚書」「第二十五章 『玉葉』に見られる課試制度関連記事の検討」「第二十六章 平安時代の詩宴に果たした謝靈運の役割、以上である。なお巻末に「図版一覧」「索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2023年9月20日発行 勉誠社刊 A5判縦組み 472頁 定価13,200円 ISBN 978-4-585-39033-6)

大川孔明著『古代日本語文体の計量的研究』

古代日本語文体を対象として主にCHJを用いて計量的手法に基づく調査分析を行い、様々な指標から古代日本語文体の体系的な位置づけを検討するものである。本書は日本語学会論文賞叢書の第4冊目にあたる。

本書は全6部、13章からなる。各部の構成は以下のとおりである。「第1部 序論」

は「第1章 文体論の所在」「第2章 古代日本語文体史研究の現状と問題」「第3章 計量的文体研究の方法論」からなる。「第2部 計量的手法による類型化」は「第4章 多様な指標から見た文体類型」「第5章 『今昔物語集』本朝部の文体的位置づけ」以上2章を配し、計量的手法によって CHJ 収録の平安鎌倉時代の25作品を分析して各指標による位置づけを示す。「第3部 語彙的指標に基づく類型化」は「第6章 和漢の対立に関する語彙から見た文体類型」「第7章 叙述語から見た文体類型」の2章、「第4部 統語・文章的指標に基づく類型化」は「第8章 文接続から見た文体類型」「第9章 叙述類型から見た文体類型」「第10章 文の長さから見た文体類型」の3章から構成され、それぞれ語彙、統語の観点からの分析が示される。「第5部 古代日本語文体の体系」は「第11章 古代日本語における文体指標の重要度」「第12章 古代日本語文体の体系的位置づけ」の2章、「第6部 結論」は「第13章 本論の意義と今後に向けて」を配する。(遠藤佳那子)

(2023年9月21日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 246頁 定価11,000円 ISBN 978-4-8386-0782-2)

吉田幸治編、金澤俊吾・鈴木大介・住吉誠・西田光一・吉田幸治著『話し手・聞き手と言語表現——語用論と文法の接点——』

本書は、2018年の日本英文学会第90回大会において「話し手・聞き手と言語表現——語用論と文法の接点——」と題して行われたシンポジウムの内容を中心に、語用論的な側面を重視した論考5編を収めたものである。主に英語を中心に、好まれる表現と好まれない表現について、語・句・節・談話の各レベルから文化的側面も含めながら論じる書である。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」に続き、「第1章 「文化的タテマエ」と文形式の選択」(吉田幸治)、「第2章 英語の名詞句にみられる構成素の省略について」(金澤俊吾)、「第3章 語用論と文法の接点からみる「脱規範」——二重 that 構造の場合——」(住吉 誠)、「第4章 副詞が生む語順の多様性とその伝達の機能」(鈴木大介)、「第5章 英語の談話照応における代名詞と定名詞句の機能分担」(西田光一)。末尾に「あとがき」「参考文献」「索引」「執筆者紹介」が付く。(椎名渉子)

(2023年9月24日発行 開拓社刊 A5判横組み 232頁 定価2,420円 ISBN 978-4-7589-2601-0)

カルロス・アスンサン、黒川茉莉、豊島正之編『天草版ラテン文典 巻一全訳』

マヌエル・アルバレスの「ラテン文典」を原典として1594年に長崎で刊行された「天草版ラテン文典」の巻一には日本語に関する記述がある。本書は初めてその巻一を英訳・和訳し、注釈を加えたものである。原典の「ラテン文典」はロドリゲス『日本大文典』にも引用された、イエズス会の標準文法書である。歴史上初めて日本語の「準体」の記述がなされるなど、日本語史、日本語学史の資料として読み直されるべき書であり、

本書の刊行によってそれがより容易になった。

なお、八木書店ウェブサイトにも編者によるコラム「イエズス会が刊行した文法書を読む——『天草版ラテン文典巻一全訳』刊行の弁——」が³、貴重な資料画像も含めて掲載されており、これも必読である。(遠藤佳那子)

(2023年9月25日発行 八木書店刊 B5判横組み 327頁 定価10,780円 ISBN 978-4-8406-2270-7)

窪園晴夫著『一般言語学から見た日本語の語形成と音韻構造』

本書は、1995年に出版した『語形成と音韻構造』(くろしお出版)の続編として、語形成と音韻構造の関係をめぐる筆者のこれまでの研究を、国内外における研究の動向を踏まえてまとめたものである。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」に続き、「序章 本書の概要」,「第1章 語形成と音韻構造の関係」,「第2章 東京方言の複合語アクセント」(【参考資料1】「X-物」のアクセント),「第3章 一語化しない複合語」(【参考資料2】並列構造の複合語,【参考資料3】右枝分かれ構造の複合語),「第4章 アルファベット頭文字語のアクセント」(【参考資料4】アルファベット頭文字語調査語彙),「第5章 短縮語形成のメカニズム」,「第6章 語形成過程のアクセント:無標の出現」(【参考資料5】混成語データ),「第7章 テンプレート型の語形成」(【参考資料6】〔お+名詞(N)〕),「第8章 結び」(【補遺】平板型の生起条件,【参考資料7】動詞からの転成名詞を後部要素(N2)とする複合語)。末尾に,「英文要旨(English summary)」「参考文献」「著者紹介」が付く。(椎名渉子)

(2023年10月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 312頁 定価4,950円 ISBN 978-4-87424-956-7)

岸本秀樹, 臼杵岳, 于一楽編『構文形式と語彙情報』

本書は、現在の構文論では分析が困難で周辺的であるとされている構文に着目し、レキシコンの情報が構文形成にどう貢献するかを捉える論考を所収する論文集である。日本語・英語の論考以外には、中国語、ハンガリー語、ドイツ語、スワヒリ語、マテング語も検討し、通言語的原理を示す。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」に続き,「第I部 日本語における形態・意味・統語の問題」には,「第1章 「青い目をしている」構文はどのように形成されるのか?」(岸本秀樹),「第2章 「Nをする」構文の多様性と語彙情報の役割——動詞派生名詞を中心に——」(小葉哲哉),「第3章 「動詞の連用形+具合をしている」構文について」(藤巻一真),「第4章 日本語の「を」使役と「に」使役をめぐって——依存格システムと「する」の潜在——」(加賀信広),「第5章 動詞化形態の分布とル動詞のRoot派生分析」(田川拓海),「第6章 日本語の丁寧形」(西山國雄),「第7章 認識副詞の肯定極性に関する一考察」(三浦香織),「第8章 統語的名詞化と項の具現化」(臼杵 岳),「第9章 語彙的複合動詞における項の具現形式」(由本陽子)。「第II部 諸外国語における形態・意

味・統語の問題」には、「第10章 動詞 visit の語彙意味論」(出水孝典),「第11章 英語の軽動詞関連形式における軽動詞性と構文性——giveを主動詞とした文について——」(日高俊夫),「第12章 英語における非典型的な項の具現化——場所が主語で現れる構文を中心に——」(工藤和也),「第13章 状態変化動詞と事象の所有——経験主の語彙表示をめぐって——」(今泉志奈子・藤縄康弘・米田信子・高橋美穂),「第14章 ハンガリー語における非典型的な項の具現化——「痺れ」はどこからやってくるのか——」(江口清子),「第15章 主語名詞の意味構造と項の具現化——中国語の非典型的な主語構文に着目して——」(于一楽)。末尾に「執筆者紹介」が付く。(椎名渉子)

(2023年10月12日発行 開拓社刊 A5判横組み 364頁 定価5,060円 ISBN 978-4-7589-2393-4)